



Title	真名本『曽我物語』における大磯の虎：苦悩の克服と愛執の様相
Author(s)	ルーンピロム, カナパット
Citation	詞林. 2011, 49, p. 45-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67627
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

真名本『曾我物語』における大磯の虎

——苦悩の克服と愛執の様相——

カナパット・ルーンピロム

一、はじめに

真名本『曾我物語』において、ほとんどの女性の登場人物が、愛する者と離別し、愛別離苦による悲哀に沈む姿が描かれているが、それらの女性の中で最も注目される人物は、曾我十郎の妻である遊女・大磯の虎という女性である。

大磯の虎（以下、「虎」）の苦悩譚に関して、高原由香里「『真名本曾我物語』における大磯の虎の遊女性について——語り手と作中人物の関係についての一考察」¹は、自らを世間から賤視される存在と捉える虎の姿について論じ、村上学「曾我物語の女性像と在地の語りと」²は、愛別離苦の悲哀を抱えると同時に、愛する者の死後、現世に生きようとする、虎をはじめ女性の登場人物の態度を指摘している。しかし、十郎の死後の虎の行動に注目してみれば、遊女の身分による苦悩と、愛別離苦以外に、未だ言及されていないもう一つの苦悩が存在していることが分かる。それは、愛する者の苦悩への共感による苦悩である。そのような苦悩は、愛する者の鎮魂・救

済という虎の行動を推し進める一因と見なす事ができるものである。よって、先行研究において指摘されている二つの苦悩と合わせ、第二節において考察する。

十郎の死後、虎は曾我兄弟（以下、「兄弟」）の後世のために、出家し、修行に励みながらも、亡き愛する者を偲び、悲哀を抱え、臨終の際まで、愛する者への執着を振り払うことができなかったにもかかわらず、そのまま往生を遂げたと解釈せざるを得ない描写が真名本『曾我物語』ではなされている。そうすると、最終的に虎は苦悩を克服できたのか、あるいは、どのように苦悩を克服したのかという疑問が浮上するだろう。このような問題意識から、第三節において虎の苦悩の（非）克服の様相を考察する。

さらに、亡き愛する者への執着、いわゆる愛執は、苦悩の根本的な原因として存在し、虎の往生の場面にも表出することから、虎の表象における愛執の様相を考察する必要がある。亡き愛する者への執着によって悲哀に暮れつつ、愛する者の救済のために懸命に修行し、最終的に往生を遂げる女性の姿

は、真名本『曾我物語』と影響関係を持つ『平家物語』における建礼門院徳子の描写にも表れており、虎の表象と建礼門院の表象の共通点が窺える。そこで、第四節において、『平家物語』の建礼門院の表象における執着と往生の様相を踏まえ、虎の往生の場面における愛執の意味を考えることとする。

二、苦悩の様相

本節では、虎の苦悩の克服について論じる前提条件として、虎の苦悩の様相について整理・分析することとする。

二・一、遊女という身分による苦悩

(イ)「嗔恨めしの御心の中、問はずは知らせじと思ひ給ひけるかや。まことに童と申すは大磯の遊女にて、浅猿き身なれば①世の常の女の数には思ひ給はじ。されば始めより仰せられぬは理なれども、身に取ては両意なし。殿に憑まれ奉て後は、早や三年になりぬ。今更恨み奉るべからず。まことにさやうに思ひ立ち給ひなば、童も髪を剃りつつ別の庵室を結び副へて、衣をも染め、袈裟をも洗ぎ、殿は爪木を取り給はば童は華を摘みて、①一仏浄土の縁となり奉るべし。猶しそれをも免し給はずは、自ら髪を刈り落しつつ山々寺々をも修行せむ。釈尊の御出家の後、まことの菩提に入らせ給ひし暁は、耶輸多羅女も御出家あり。(夫婦の縁によって夫婦とも同じ菩提の道に入

る先例、中略)されども夫婦の縁に依る御事なれば、同じ菩提の道に入り給ふ。②故に法華の方便品には「仏種從縁起」是故説一乘」と説かれたり。仏種は必ず縁より起ると云ふ事は釈尊の金言なり。一乗の妙文なり。誰かこれを疑はむ。十善の榮樂の人々さへかくの如し。況んや下位の我らをや。況んや貧道孤独の身においてをや。今まで厭はざりけるこそ悲しけれ。後にも聞し食せよ。さやうになり給ひなむ後は、この躰にてあり畢つまじきぞ」

〔卷六、②三一・二三頁〕

(ロ)「嗔恨めしや。なほも正直には仰せられざりける事の悲しきよ。これ程の大事をば、争か云ふに甲斐なき女の身なりとも露ばかりも披露すべき。ただ一人御在す母御前をだにも心強く振り捨てて思ひ立ち給ひなん事を、何思ふともあるに甲斐なき身にて止め申すとも少しも叶ふまじ。されば力及ばぬ別なるべし。しかれどもかやうに知らせ給ふ事こそ喜しけれ。まことに仰せの如く、童が兜のやうなる遊者は、少々宿世なければ徳見する人をば思はしきやうに賞し、貧し気なる者には目をも見懸けぬは世の常の習ひなれども、童、殿を見初め奉て後は早や三年になりぬ。浅からず思ひ奉て、心苦し気なる御有様を見奉る度ごとに、御志の程をば知らねども、②人と等しき身ならましかば、などか時々の便ともなり奉らざらむ云ふに甲斐なき身こそ口惜しけれと、由なき心を尽す事

もあり。

〔卷六、②二五・二六頁〕

(イ)は、虎が、「殺された父の供養のために、出家遁世するので、別なければならぬ」という十郎の告白(イ)の直後、嘘であることを告白する(ロ)を聞き、悲しむ場面である。(ロ)は、虎が、十郎から敵討ち決行の意志を告白されるものの、遊女という立場にある自分には何の助力もできず、落胆する場面である。まず、(イ)二重傍線部「浅猿き身」、「下位の我ら」、「貧道孤独の身」と、(ロ)二重傍線部「童が党のやうなる遊者」、「甲斐なき身」からは、遊女は身分が低いという虎自身の身分に対する考え方が確認できる。さらに、(イ)傍線部①と(ロ)傍線部②からは、人並みの女性と同じ立場にない、十郎を何も助けられないという我が身を恨んでいることが分かる。

ここで注目されるのは、右の引用から、遊女という身分による虎の苦悩が、虎の発心と連関していると考えられること及び、次に示すように、その発心が、十郎が敵討ちを告白する場面と連関していることである。

《十郎が敵討ち決行を告白する場面》

これ程に真実の志を思ひ知らずして、心強く隠し遂ぐるものならば、後の恨みも深かるべし。女性なれどもこれ程に小賢う語り連くる詞の末を空しくして、畢てむ事も哀れなり。また自ら思ひ出づる事もあらば、恨むる心もなく念仏の一返なりとも申して廻向せば、量なき功德な

るべし。差賀に披露すべからぬ事を云ひなん。何かはよも披露せじものを。女性ながら心深き者なれば、知らせたりとも披露せじものを。

〔卷六、②二四頁〕

十郎が虎に告白する理由は、右のように、虎の愛慕に感動した事と、傍線部「心深き者」と賞賛される虎の性格である。虎は、前掲(イ)波線部①「一仏浄土の縁となり奉るべし」とあるように、夫婦ともに出家する縁によって一緒に極楽往生を遂げようという願いを持ち、又、波線部②『法華經』に記された釈迦の因縁果報の教えを語っていた。そのため、十郎に「心深き者」と褒め称えられたのである。そのような虎の姿からは、恋愛の他に仏教的な側面も見えてくる。

このように、虎の純粹な愛と「心深き者」とされる性格から、十郎にとつての虎は普通の女性、遊女という身分を越える特別な存在であると言える。だからこそ、十郎は敵討ち決行の意志を告白した上に、死後、虎に供養をしてもらいたいと望んでいたのである。

以上のように、遊女という身分による虎の苦悩は、単に不遇な境遇を表現するのみならず、愛する者への思慕の深さと仏道への信心と連関していることが分かる。

二・二、愛別離苦

虎は十郎から敵討ちの決行を聞き、次の場面のように十郎との離別を歎いた。

「それにまた出家遁世をもして、また再び返るべからずと仰せられつるだにも、飽かぬ別の悲しさは喻へん方もなかりつるに、されどもそれは生きての別なれば、我も人も甲斐なき命だにもあらば、もしやの憑みもありつるに、さては永き別にてあらん事の悲しさよ」とて最度涙も昇敢へず悶え焦れけり。

〔卷六、②二六頁〕

先述したように、十郎が、「殺された父の供養のために、出家遁世するので、別なければならぬ」と言ったことも悲しいことではあるが、それは「生きての別」なので、再会できる機会もあるのだろうが、十郎が敵討ちの本意を遂げるということは、傍線部にあるように永遠の別れである、と虎は歎くのである。愛別離苦は十郎との離別の場面のみならず、出家修行、とりわけ往生の場面にも表れており、虎の苦悩の様相の中で、最も注目されるものであるが、この点の考察は後述することとする。

二・三、愛する者の苦悩への共感による苦悩

兄弟の死後、虎はすぐに出家するのではなく、曾我の館を訪れ、兄弟の母（以下、「母」と対面し、虎は兄弟の百箇日の供養のために、母と一緒に箱根山の別当の所へ赴くのであるが、ここで興味深いのは、虎と母が、兄弟の敵討ち決行の道行きを辿るという設定である。虎と母の道行きにおいて、兄弟と道行きを共にした従者たる丹三郎と鬼王丸から、生前

の兄弟の姿が語られ、虎と母の心に兄弟の苦衷が彷彿した時、兄弟の苦悩への共感が生じるのであるが、その共感による虎の苦悩を考察する前に、まず、兄弟の敵討ち決行の道行きにおける苦悩を見ていくこととする。

《兄弟の道行き》

● 鞠児河

「未だ知し食さずや。罪人の渡る河は濁るなり。死出の山・三途の大河と云ふ事ありとて、我らが思ふには、鞠児河こそ三途の大河、宮根の御山こそ死出の大山よ。鎌倉殿こそ瑳魔王よ。親の敵に合はむ処こそ瑳魔の庁よ。数万人の侍共こそ牛頭馬頭阿防羅刹にてはあらむずれ」とて打渡りけり。十郎は迎への岸に打上るとて、

① 五月雨に浅瀬も見えぬ鞠児河浪に争ふ我が涙かな
五郎も手縄を引へて、

② 渡るより深くぞ頼む鞠児川親の敵にあふ瀬と思へば
〔卷七、②七三頁〕

まず、十郎は鞠児河を渡った際、傍線部①「五月雨に」歌を詠む。この歌には、十郎の悲歎に満ちた心情が表現されている。なお、一方の五郎は傍線部②「渡るより」歌を詠み、父の敵討ちを実行したいという強い意志を表明している。

● 湯坂の手向

十郎は湯坂の手向にて跡の方を振り返り見れば、曾我の里の朝まだき、煙も未だ晴れ遣らず。佐河・古宇津・高礼

寺の山の方遙々と見送るに付けても、飽かぬ別の大磯の宿、年来馴染みし夫婦の事、思ひ出でられて悲しかりければ、「畛見給へ、五郎殿。畛の煙の見ゆる里こそ、我ら幼少の時より住み馴れし処なれ。只今この山を打超えなん後は、いづれの生にて見たも見るべき」と云て涙を流せば、

〔卷七、②七三・七五頁〕

次に、十郎は湯坂の手向で後ろを振り返り、炊事の煙に霞む曾我の里を見ると、故郷を懐かしみ、又大磯の方を向くと、虎の事を思い出した。このように、兄弟の道行きにおいては、郷愁と愛する者との別れの悲哀が見られる。

《虎と母の道行き》

・ 鞠児河

鞠児河を打渡りければ、「波に諍ふ我が涙かな」と十郎が詠めける歌の心、「今日は敵に合ふ瀬と思へば」と五郎が読みける歌の心、今更思ひ合はされて、曾我の女房は泣く泣く、

たまさかに行き交ふ道の涙川波の立居に袖朽ちぬべし

これを聞きも敢へず、虎は流るる涙を押へて、

契あらばいかで歎きをつけやらん死出の山路の休み
処へ

〔卷十、②二五九・二六〇頁〕

一方、虎と母は鞠児河を渡った際、《兄弟の道行き》傍線部①の十郎の歌と、傍線部②の五郎の歌を従者たちから聞い

て、波線部「今更思ひ合はされて」とあるように、兄弟の心に共感した。その十郎の歌に表された悲哀に対して、傍線部のように、虎は自らの悲しみを死出の山路で休んでいる十郎の魂に何とかして伝えたいという歌を詠む。それによって、虎の十郎への共感と悲哀への同感が表出されたのである。

・ 湯坂の手向

湯坂の手向に打登り跡の方を振り返り見て、虎、「畛、御覽侍へ。この人々の打登り給ひける時も、只今の如く畛の故郷を振り返り見て、いかばかり心細く思はれつらむ。今また見ても心憂し」とて泣きければ、母も袖をぞ揺られける。中に虎が思ひこそ哀れなれ。「この跡にて跡の古里を見むことも只今ばかりの事ぞかし。宮根の御山にて出家を免さるるものならば、足に任せて迷ひ出でつつ、念仏三昧を勤行してなき人の後世を助け、我が身の菩提を助けむと思ひ切て出づる道なれば、事も愚かにあるべきや。別の涙の倍鏡、懷中に入らむ事も今日ばかりなり。宮根の坊に捨てむ後はまた見る事もあらず」

〔卷十、②二六〇・二六一頁〕

次に、兄弟と同じように湯坂の手向に登った虎は、兄弟が振り返って故郷を見た際、郷愁を感じただろうと兄弟の心情を推し量り、傍線部のように出家修行によって兄弟の後世を助けないという願いを吐露した。又、波線部のように自らも仏道に入り、愛別離苦を乗り越えようと望んでいたことが分

かる。

以上のように、虎が、兄弟の道行きを追体験することによって、虎の兄弟への共感とそれに起因する苦悩が惹起されたのである。この道行きの設定により、愛する者の救済と虎自身の苦悩の克服というテーマが提示され、兄弟の救済譚と虎の出家譚への展開が用意されると考えられるだろう。

三、苦悩の克服

前節では、虎の苦悩の様相を見てきたが、本節では、虎がどのようにその苦悩を克服したのか、あるいは、していないのかを考察する。

三・一、出家と供養

兄弟の百箇日の法要が終わった際、虎は箱根の別当を戒師として出家し、「禪修比丘尼」と称した。虎が出家した場面は次のとおりである。

虎は本より袈裟衣を用意したりければ、別当を戒の師と為奉て出家しつゝ、名をば禪修比丘尼とぞ申しける。勞しかるべき齡かな、生年十九歳と申す建久四年癸丑九月八日には花の袂を改めて深き墨染に替へつゝ、朝夕見るに飽き足らぬ袖の鏡を取出でつゝ、権現の御正鉢に懸け奉て、「現世安穩後生善処」と祈りつゝ、「別れし諸人を一仏浄土へ」と念じて〔巻十、②二六八・二六九頁〕

傍線部「花の袂を改めて深き墨染に替へ」という表現によって、遊女から出家者への虎の変貌が示されていると言えよう。出家した虎は兄弟が亡くなった富士野の井出を訪れ、四天王寺をはじめ、寺社に参詣参籠する修行の旅に出た後、一周忌の法要のために曾我へ戻った。虎が母に再会した場面は次のとおりである。

母は虎が顔を熟々と見給ひて、「さしも花色にて厳しかりし顔付も黒み亘りて、何賀年寄り鉢に見ゆる哀れさよ」〔巻十、②二七二頁〕

母は虎の老けた容貌を見て、「哀れ」と言った。そのような母の言葉によって、虎の外形的変化が強調される。その後、兄弟の納骨、回忌の供養等、兄弟の供養救済に関わる宗教的な役割が次々と記される。このような出家者、供養者への虎の姿の変化によって、「甲斐なき身」という以前の存在から分離し、遊女という身分による苦悩を克服した虎の姿を見出すことができるだろう。

三・二、十郎の思いが残る場の再訪

十郎の思いが残る場を辿る虎の行動については、先述した、兄弟の従者たちに導かれた虎と母の道行き譚において、その一端を見てきた。しかし、他人に導かれ、自らの身へ兄弟の苦悩を引き受ける道行きの他に、虎自身の意思によって十郎の思いが残る場所を訪れ、十郎の面影を偲ぶ虎の道行きがあ

る。

十郎の思いが残る場の中で、虎が最もよく訪れる場所は兄弟の故郷の曾我である。虎は十郎と別れる前に、曾我へは一回しか連れて行ってもらっていなかった。しかし、曾我は二人の最後に別れた場所であるので、虎にとっては最も思い出深い場所と考えられるだろう。そこで、十郎の死後の、虎の一回目と二回目の訪問に注目する。

《一回目の曾我訪問》

虎は母の後躰を見送り奉て、十郎に別れし時の心地して始めて思ひぞ倍りける。物を思はぬ時だにも穠の心は悲しきに、軒半を吹く風の音は言問顔に過ぎ行けば、最度辛さぞ倍りける。

〔巻十、②二五八頁〕

一回目の訪問は虎が初めて母と対面した百箇日の供養の時である。右に引用した文章では、十郎と最後の夜を過ごした部屋に戻った際、秋の雰囲気の中でますます深い悲しみに沈む虎の心情が表現されている。傍線部の「物思いに沈んでいない時でさえも、秋は心を悲しくするものなのに、軒先を吹いてくる風の音がものを言いかけるように過ぎて行くとますます辛さがまさった」という虎の心情描写は、『東洋文庫 真名本曾我物語2』（平凡社 一九八八年）の注で示されているように、『新古今集』秋・西行法師の歌「おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ」等にしばしば見られ、和歌的情緒に満ちた表現であると言える。ここで注目

したいのは、二重傍線部「言問顔」のように、風の音を、ものを言いかけるような人の声となぞらえ、十郎と話した最後の別れの夜を想起する描写である。それは単に愛慕による悲哀を表す典型的な和歌表現に相違ないが、目にした風景に十郎の姿を投影し、昔の面影を偲ぶ様子は、虎の道行き譚において、他にも見られるものであるので、確認しておく。

《二回目の曾我訪問》

虎は住み馴れし古の屋形へ立ち入りたれども、見馴し人ぞなかりける。千種の華を見亘せば、昔の人の香して、漫に涙ぞ進みける。

〔巻十、②二七三頁〕

虎は出家後、一回忌の供養のために曾我に戻り、十郎の館に入って、庭で千草の花を見ると、十郎の袖の香りがするよう感じている。二重傍線部「昔の人の香して」という表現は『東洋文庫 真名本曾我物語2』の注で指摘されているように、『古今集』夏・よみ人しらずの歌「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」等に見られるものであるが、虎は実際に十郎の姿をそこに感じたのだろうか。

そこで、その後、虎が兄弟の骨を納め、松井田の宿に泊まった際の描写を見ると、

確井の峠に息みつつ、

なき人は音信もせて玉鉦の待ちし月日ぞ帰りきにけり

かくてその夜は松井田の宿に宿て、泣く泣く夜をぞ明し

ける。「せめて別れし諸人の、夢の枕にも来て、なにか幻の間の言告もやなかるべき」と悲しくて

〔巻十、②二七六頁〕

傍線部の歌のように、亡き十郎の「音信」がないと歎き、又波線部のように、せめて十郎が夢に現れ、「言告」してほしいと吐露していることが確認できる。よって、「昔の人の香して」という表現は、「音信」や「言告」の類ではなく、前掲の「物を思はぬ時だにも」と同様に、典型的な愛慕を表す表現と見なすべきだろう。

以上のように、再訪して目にした風景の中に、十郎の姿を連想する表現が用いられていることが窺えるだろう。

次に注目したい場所は、虎が二回訪れる、兄弟の死に場所、井出の屋形である。一回目の訪問は兄弟の百箇日の供養の後、すなわち、虎の出家直後のことである。十郎が虎のもとに通っていた頃の一夜の別れの悲しみが蘇り、それよりも辛い死別によつて空しい人生を送っている虎の心情が表出されている。しかし、一回目の訪問には、問題となる十郎の面影の幻覚が確認できないため、二回目の訪問のみを検討することとする。

《二回目の井出の屋形訪問》

(イ)「これは曾我十郎殿と五郎殿と富士の郡六十六郷の内の御霊神とならせ給ひて候ふ間、富士浅間の大菩薩の客人の宮と崇め奉る御神」と申しければ、虎はこれを聞て、昔の面影に合ふ心地して七日七夜は社の内にて不断念仏

しつつ、明方になりければ、虎社を出でて泣く泣く

(ロ) 出でて行くあとの恋しき富士の根のこのもと神のひとりぶしとは

(ト) 詠みて出でければ、森の中の大木の梢に十郎が声付きと覺しくて、

出でて行くあとを見るにも馴れそめし昔の人の袖の香ぞする

これを聞て虎はまた立ち帰り、七日七夜念仏して二人の聖霊成仏得道と祈り、八日と申せしには社の内をば出でにけり。その後は曾我の里へ返て不断三昧念仏をぞ行ひける。

〔巻十、②二八〇・二八一頁〕

二回目の訪問は三回忌の法要直後である。今回が一回目と異なるのは、兄弟を祀る社があることである。(イ)では、兄弟が富士郡六十六郷の御霊の神となったことを聞いた虎は、傍線部のように、十郎の昔の面影に会う心地がして、七日七夜参籠し、一心に念仏した。(ロ)では、虎が社を出ようとする時に、「出でて行くあとの恋しき」と十郎を思つて歌を詠じたところ、虎は自らの歌に應えるように「出でて行くあとを見るにも」という十郎の歌が、二重傍線部のように幻聴として聞こえた。そこで、虎は立ち戻り、七日七夜念仏し、兄弟の御霊が成仏するように祈った。その後、虎は曾我に帰り、不断三昧念仏を行った。

前掲波線部「せめて別れし諸人の、夢の枕にも来て、など

か幻の間の言告もやなかるべき」という願望と、この場面に見られる十郎の幻覚の出現を合わせて見ると、十郎に会うような心地と、幻聴が発生したことは、過去の十郎の面影を偲ぶのみならず、現世における十郎の存在を求める虎の潜在意識を示唆していると考えられるだろう。

虎が兄弟の故郷である曾我、兄弟の死に場所である井出の屋形を再訪するという設定は、先述の道行きの際、虎が「出家を免さるるものならば、足に任せて迷ひ出でつつ、念仏三昧を勤行してなき人の後世を助け」と発言したように、兄弟の供養・救済に対する虎の役割と関わっており、鎮魂譚を支えるものと見なされる。しかし、兄弟の思いが残る場で、幻覚を通して十郎の面影が想起されるという出来事に注目すれば、そのような虎の行動は単に使命を果たすことを示すのではなく、鎮魂の使命の裏に、現世において十郎に再会したいという虎の願望が投影されているものと捉えられる。このように、悲哀が絶えず、まして現世にいたまま愛する者に再会したいという虎の意志が表されたことから、虎は、兄弟の道行きを辿った際に抱いた、出家及び修行による愛別離苦の克服という所期の目的が実現できていないと考えられるだろう。

四、愛執の様相

前節で考察したように、十郎の声が幻聴として聞こえる場面から、単なる愛別離苦による悲哀のみならず、現世におけ

る十郎の存在を求める虎の意志が表されていることが分かり、亡き愛する者への虎の執着が見出されるが、ここで重要な事は、十郎の幻覚の出現が前掲の場面のみならず、虎の往生の場面にも見られるという事である。

《虎の最期の場面》

その後虎はいよいよ弥陀本願を憑みて年月を送りける程に、ある晩頃に御堂の大門に立ち出でて、昔の事どもを思ひ連けて涙を流す折節、庭の桜の本立斜に小枝が下りたるを十郎が躰と見なして、走り寄り取り付かむとすれども、ただ徒の木の枝なれば低様に倒れにけり。その時より病付て、少病少悩にして、生年六十四歳と申すに大往生をぞ遂げにける。そもそも建久四年癸丑九月上旬に宮根の御山にて出家して後、十九歳の冬のころより六十四歳の今に至るまで四十余年の勤行、その勤終に空しからずして、耳目を驚かす程の往生を遂げにけり。およそ厥の平生の霊徳、臨終の奇瑞、連綿として羅縷に遑あらず。

〔卷十、②二八五頁〕

虎の最期の場面において、虎はますます阿弥陀の本願を頼み、年月を送っていたところ、ある夕暮、昔の十郎を回顧する。すると、傍線部のように、虎は桜の木の枝が斜めに下がっているのを十郎の姿と思い、走り寄ってつかもうとするが、それは幻影にすぎなかった。その後、病気になり、長年の勤行の利益によって往生を遂げたという。

十郎の声が幻聴として聞こえた場面と、桜の枝を十郎の姿と見誤った場面については、会田実氏が「これらからはとても一筋に得道菩提を祈っている宗教者としての純粹な姿は浮かんでこない。これら、愛への執着としか考えられない一連の描写は、会いたいという祈りから、十郎の声の聞こえてくる相聞そして最終的には桜の木の下に十郎の姿を見てしまうというように次第にそれが高まる形で描かれている」と指摘しているが、募った虎の愛執の描写が往生の場面に設定されていることは、どのような意味合いを持っているのだろうか。そこで、四部合戦状本『平家物語』^⑤灌頂巻における建礼門院の往生の場面を分析することによって、虎の往生の場面に表れる愛執の意味を考察するための材とする。

《女院御往生》

承久三年、後鳥羽院の御合戦に都も閑かならず。一院を始め進らせて、御子達・院々・宮々も悉く東夷の為に国々へ流されたまふを聞食すに付けても、平家の都を落ち、西海の波の上に漂ひつゝ、終に西海の波の底に沈みたまひし安徳天王の御事を、今の様に思食し合はすに付けても、弥御歎きも尽きせねば、^①「何かなる罪の報ひにて、斯かる憂き世に生れ値ひて、憂き事のみを見聞くらん。」(中略)之に付けても朝夕の行業怠らせたまはずして、御年六十七と申す貞応二年の春の暮、東山の鷲尾と云ふ処にて御往生有り。臨終正念にてぞ御在しける。

紫雲空に棚引き、異香室に薫じ、音楽西に聞こえ、聖衆東へ来たりければ、終に往生の素懷を遂げさせたまふ。

^②今生の御恨みは一旦の御歎きなり。後生成仏の御喜びは類無き御事ぞかし。「善知識は是大因縁なり」と経文に在るも理かな。形容は咲ふが如くして、端坐して息絶えたまひぬ。則ち是、女人往生の規模は、末代の成仏の手本なりと云々。〔四八三頁〕

右のように、承久の乱が起こり、女院は高倉院の皇子、女院の継子である後鳥羽院などが配流されたことを聞き、平家一門の滅亡の時を思い出した。波線部「平家が都を落ちて西海の波に漂い、安徳帝が海に沈んだことを、今のように合わせて考えても、ますます歎きが尽きない」とあるように、亡き愛する者への執着による女院の悲哀が露呈している。ただし、注目されるのは女院が悲哀に沈んだまま往生を遂げたのではないことである。女院の回想に続き、傍線部①「どのような罪の報いで、このような憂き世に生き、愁い事のみ聞くのだろう」とあるように、女院が昔の罪を認識していることが見出される。又、女院の往生に続く、傍線部②「この世の恨みは一旦の悲しみである。後世で成仏できる喜びこそ、限りのないことである。「善知識は是大因縁なり」と経文に記されたことも、もつともである」という記述から、恨み、悲しみは翻って、往生結縁となることが分かる。

小林美和氏は、延慶本における、平家の一員として一門の

罪業を懺悔する女院の行動を論じた中で、この世の恨みは一旦のことであると記される箇所について、「一族の「恨み」を「一旦ノ事」として閉じ込めることにより、怨霊の発動を抑止しているといえる」と指摘している。よって、四部合戦状態においても同様に、平家の代表たる女院が自らの一門の罪業を認め、恨みを一旦の事とすることによって、恨みが解消されると解釈できる。そのような設定は『平家物語』の諸本に共通しており、怨心をなだめる物語の主題を支えるものと言えるだろう。以上のように、菩提に入る前に、女院の恨みや過去への執着が解消されるのならば、『平家物語』の女院の往生に関しては、現世における苦悩は克服されたものと見なせるだろう。

亡き愛する者への愛執の点に着目して、虎と女院の表象を比較してみると、女院と虎が亡き愛する者へ執着しているところは共通しているが、虎の往生には、往生の前提としての現世における苦悩の克服が記されず、愛執による苦悩を抱えたままで往生を遂げると解釈せざるを得ない点に、女院の往生との相違点が見出されるのである。このように、愛執による苦悩を抱えたまま往生を遂げる姿は、虎に特異な往生の仕方と言えるだろう。

五、おわりに

以上のように、真名本における虎の苦悩の様相とその（非）

克服、特に克服しようとするも、愛執によって克服できない愛別離苦の様相を考察してきた。愛執は苦悩の原因また往生の妨げと見なされるにもかかわらず、愛執による苦悩が虎の往生の場面に表れることから、当時の往生の意味は、「真の発心はまず孤独無援の自己と向き合うところから始まるのであり、愛別離苦を含む四苦八苦の表現も自己を俗世から遮断して真に一人になるための方便でしかない」という元来の往生から変容していた事が窺われるだろう。しかし、物語が意図的に元来の往生の様相と異なる要素として、愛執による苦悩を往生の直前に設定したからこそ、読み手は悲歎に暮れる女人に対する仏の救済の意味を実感でき、仏の慈悲を感得しうると考えられるのである。

注

(1) 『群馬県立女子大学国文学研究』十七（一九九七年三月）

(2) 『説話文学研究』二（一九六八年十二月）

(3) 福田晃「真名本曾我物語と平家物語」（『曾我物語の成立』三弥井書店 二〇〇二年、初出二〇〇二年）は、虎の説法と往生の記述の構成は、建礼門院の六道語りと往生の記述に沿ったものであり、さらに虎の往生の記述には、建礼門院の往生の記述と類似の表現が見られると指摘し、虎と建礼門院の往生の記述の関連性について論じている。

(4) 会田実「他律からの反転―虎最期の意味するもの」（『曾我物語』その表象と再生』笠間書院 二〇〇四年、初出一九八八年）

- (5) 真名本『曾我物語』と四部合戦状本『平家物語』の関連性については、水原一「『四部合戦状本平家物語』批判―延慶本との対比をめぐる―」(『平家物語の形成』加藤中道館 一九七二年)、村上学「『曾我物語の諸本』」(『国文学解釈と鑑賞 別冊 曾我物語の作品宇宙』二〇〇三年二月)、福田晃「真名本『曾我物語』と平家物語」を参照。本稿は以上の論考に基づき、真名本『曾我物語』に近接する「四部合戦状本」から本文を引用することとする。
- (6) 小林美和「『平家物語』の建礼門院説話―延慶本出家説話考―」(『平家物語生成論』三弥井書店 一九八六年、初出一九八〇年)
- (7) 延慶本には「今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覺テ、目出ゾ聞ヘシ」(『延慶本平家物語本文篇下』勉誠社 一九九一年)とある。
- (8) 平野さつき「愛別離苦を越えて―『平家物語』における女性と仏教」(『国文学解釈と鑑賞』五六・五 一九九一年五月)

使用テキスト

- ・『東洋文庫 真名本曾我物語2』(平凡社 一九八八年)
- ・『訓読四部合戦状本平家物語』(有精堂 一九九五年)
- ・『新編国歌大観第一巻』(角川書店 一九八三年)

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

(Kanapat Ruenpirom 本学大学院博士後期課程)